

2023年版北海道高体連体操競技男子二部適用規則

第1章 演技の採点

第1条 原則

1. 次に示すもの以外は、(公財)日本体操協会制定2022年版体操競技男子採点規則を適用とする。

第2条 決定点

1. 決定点の構成

(1) 決定点は、次のような配点により構成される。

$$\begin{array}{l} \text{演技構成} \quad (\text{Dスコア} : 6 \text{ 技} + \text{終末技} + \text{技のグループ} + \text{組み合わせ加点}) \\ + \text{実施} \quad (\text{Eスコア} : 10.00 - \text{減点} + \text{加点} (\text{最大} 0.50)) \\ - \text{N D} \quad (\text{ニュートラル・ディダクション} : \text{ライン減点、タイム減点、技数不足等}) \\ \hline \text{決定点} \end{array}$$

2. ゆか、あん馬、つり輪、平行棒、鉄棒の演技構成、および技のグループと特別要求

(1) ゆか、あん馬、つり輪、平行棒、鉄棒の演技は次の技数を要求する。

a) Dスコア 7 技 (6 技 + 終末技)

i) 技は難度により、次の得点 (難度点) が与えられる。

A : 0.10 B : 0.20 C : 0.30 D以上 : 0.40

(2) 技のグループ、および特別要求 (種目特有の要求)

a) 跳馬を除く5種目において次の技のグループを要求する。

i) 終末技を除く3つの技のグループ (1グループにつき0.50。0.50×3グループ=1.50)

ii) 終末技の技のグループ (A難度以上0.50)

b) 技のグループは次の通りとする。

ゆか)

I 跳躍技以外の技

II 前方系の跳躍技

III 後方系の跳躍技

IV 終末技

あん馬)

I 片足振動・交差技

II 旋回・旋回倒立・転向技

III 旋回移動・転向移動技

IV 終末技

つり輪)

I 振動・振動倒立技

II 力技・静止技

III 振動からの力静止技

IV 終末技

平行棒)

- I 両棒での支持技
- II 腕支持振動技
- III 長懸垂・逆懸垂振動技
- IV 終末技

鉄棒)

- I 懸垂振動技
- II 手放し技
- III バーに近い・アドラー系の技
- IV 終末技

c) 特別要求 (種目特有の要求)

i) 跳馬を除く5種目について次の技を要求 (種目特有の要求) として演技構成に入れること。要求を満たさない場合は各々0.30のNDとする。なお、7技に入れる必要はなく、大過失で難度認定されなかった場合でも実施していれば認める。ただし倒立静止においては静止が認められなければならない。

ゆ か ・倒立静止

- ・前後 (左右) 開脚座
- ・ロンダート～後方系の跳躍技 (グループIIIの技)

あん馬 ・二つの交差技 (正交差連続でも可)

- ・横向き旋回または縦向き旋回 (正面支持～正面支持)

つり輪 ・倒立静止 (肩倒立でも可)

- ・背面水平懸垂または正面水平懸垂または十字懸垂

平行棒 ・倒立静止 (肩倒立でも可)

鉄 棒 ・け上がり

(3) 難度認定の特例

a) a 難度 (スモール・エー)

i) 体操競技の健全な発展と評価、そして普及の観点から次の技を「a 難度」とし0.10の難度点を与える。ただし、技のグループは満たせない。主なa 難度は第6条2の通り。

b) a 難度を除き、難度表に掲載されない次の技を特例として難度認定する。

(技のグループと技数を満たす)

あん馬	II	・(横向き・縦向き) 旋回 ※ 次の技に続かなくてもよい	: A 難度
つり輪	I	・屈腕での車輪倒立静止 (前方・後方)	: B 難度 (実施減点で対応)
	IV	・前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
平行棒	I	・前振りひねり倒立 45° 未満	: B 難度 (実施減点で対応)
	IV	・前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
鉄棒	III	・足裏支持回転倒立	: A 難度
	IV	・前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度

(4) 跳馬の競技方法とDスコアについて

a) 競技方法は、1跳越とする。

- b) 跳馬の価値点（Dスコア）は別紙「2022年版中学校男子適用規則（U-15）跳馬価値点一覧表」に定める。
- c) 切り返し系の技（開脚とび、閉脚とびなど）の難度点（Dスコア）は1.0とする。
- d) 台上前転は前転とびと同じ難度点（Dスコア）とする。ただし、姿勢的な減点の他、器具にぶつかるなど大欠点以上の減点を伴う。

第3条 実施

1. 実施

(1) 実施は10.00から実施減点を差し引いた得点をEスコアとする。

2. 実施減点

(1) 正しい演技からの逸脱は、すべて実施欠点であり、審判員によって相応の減点がなされる。小、中、大欠点の大きさは、正しい実施からの逸脱の程度により判定される。小、中、大欠点等の減点はFIGルール of 減点に準ずる。ただし落下のみ0.50とする。

3. 減点に関する特例

つり輪・平行棒・鉄棒において、振れ戻りは減点の対象としない。中間振動は0.30の減点とする。

振れ戻りの例：後ろ振り上がりや逆手から順手の両手持ち換え（鉄棒）

支持前振りから後ろ振り倒立（平行棒） など

4. 加点

(1) 加点は、E審判が採点後のEスコアに得点（該当する加点）をプラスする。

(2) 着地を止めた場合は安定した着地に対して、0.10の加点をする。（a 難度を除く）

(3) 美しさ、雄大さなどに最大0.40の加点を与えることができる。なお、この加点は必ずしも技に対して与えるものではない。ゆかで直立した時の姿勢や意識されたつま先など大会の主旨、レベル等を考慮し審判員が各自で判断する。ただし、Eスコアに加点を与えて10点を超えることはできない。

第4条 ND

1. ニュートラル・ディダクション

(1) あん馬において、馬体の3部分を使用しなかった場合のNDは適用しない。

(2) ゆかにおいて、2回宙返りを実施しなくてもNDの対象にはならない。

(3) ゆかにおいて、4つのコーナーに達しなくても2つの対角線上（2ライン）での実施が認められればNDの対象にはならない。2ラインの使用がなければ減点対象とする。

(4) つり輪において、振動倒立静止技を実施しなくてもNDの対象としない。

(5) 短い演技（技数不足）に対するNDは、次の通りとする。

6 技	1.00
5 技	2.00
4 技	3.00
3 技	4.00
2 技	5.00
1 技	6.00

第5条 禁止技

1. 以下の禁止技を実施した場合は、その演技を0点とする。

(1) 難度表に記載されているFIGジュニアルールの禁止技のうち、つり輪のグチョギー系の技

(2) 2回以上宙返りをする技（跳馬については、着手後に1回以上の宙返りを加える技）

第6条 その他

1. 事故防止と選手の精神的援助のためつり輪、跳馬、平行棒、鉄棒において2名までの補助者が立つことが許される。

2. 主な a 難度を以下に示す。示された技以外は大会の主旨、レベル等を考慮して審判員が各自で判断する。

ゆか)

- ・前転技群（前転、開脚前転、伸膝前転、倒立前転） 1 技まで
- ・後転技群（後転、開脚後転、伸膝後転、後転倒立） 1 技まで
- ・側方倒立回転
- ・ロンダート

あん馬)

- ・四つ足（左入れ～右入れ～左抜き～左抜き）：逆も可
- ・2つ目以降の横向き旋回（両把手、馬端、逆馬端でそれぞれ1つの技）
※ 次の技に続かなくてもよい
- ・2つ目の正交差、2つ目の逆交差（左右それぞれ1つの技）
- ・（馬端中向き）上向き下り
- ・横向き旋回から両足を抜きながら90° 転向下り（技の開始は正面支持からとする）

つり輪)

- ・肩倒立（90° 以上肘を曲げた倒立。肘曲がりの減点 0.50+姿勢欠点等を伴う）

平行棒)

- ・肩倒立（90° 以上肘を曲げた倒立。肘曲がりの減点 0.50+姿勢欠点等を伴う）
- ・開脚前拳支持
- ・腕支持後ろ振り上がり支持
- ・前振り後方かかえ込み宙返り下り（棒間）
- ・懸垂前振り後方かかえ込み宙返り下り（棒間）

鉄棒)

- ・け上がり支持
- ・懸垂前振りひねり（水平以下）
- ・懸垂前振り逆上がり
- ・後ろ振り上がり支持
- ・両手を同時に持ち換える技
- ・前方支持回転、後方支持回転
- ・後方足裏支持回転振り出し下り

3. 器械器具の寸度

公財) 日本体操協会制定 2022 年版体操競技男子採点規則に準ずる。

※ つり輪、跳馬、鉄棒については、着地マット（エバーマット）の使用を認める。

※ 跳馬の跳躍板は、ハードタイプ（3—3—2）・ソフト（3—1—2）を使用する。ソフトタイプ（3—1—2）はコイルを外し（2—1—2）として使用することを認める。使用後は必ず責任をもって元に戻すこと。